

報



會

會 岳 山 本 日

20

月 一 十 年 七 和 昭

飛驒の四日

今西 錦司

乗鞍の裾をめぐる白樺の高原に秋は酣である。徑は細い。向ふの黒木立の中に峠はあるのだが、こう一様になだらかな線では何處がそれか見堺ひもつかない。けれどもどうにか迷はずに飛驒へ越す。退い日足にやつと追いついて下りは心が豊かである。そして思つたより早く野麥の寒村にまだ残照がアカ／＼と射してゐる中に着いた。これから一夜の宿泊を乞ふて草鞋の紐を解くまでが中々に心細いのである。見知らぬ旅人がもしこんな事を云つて來たら我々の家ではどうするだらう。田舎だつて宿屋がどこそこにありますからと教へる位は當り前だ。それもこちらにはよく承知してゐるのだが行商と一緒の部屋に入れられたりするのには餘り好ましくない。そうだと云つて物乞ひの様に一軒々訪れて廻るわけのものではない。頼み込んだ家と云ふのが不思議に九分九厘まで我々に好意を持つてゐるのだから旅人は自分の泊り場を嗅ぎ付ける能力を持つてゐるのかと疑はれる。その夜の宿は偶然にも友人が再三泊つていつた家であることが爐邊の四方山話の中で判明した。

朝早くから本會街道を行く。街道と云つてもこゝには馬力さへ通ら

ぬ。人も一向通らぬ。郵便屋さんに會ふ位だ。道は谷合ひについてゐて兩岸の紅葉と云ひ溪流と云ひ眺めは中々よい。久し振りに訪れた梓川の紅葉もよいには違ひなかつたが鐵道省の割引切符を持つた團體遊客が上高地を我物顔に横行するには少々面喰つた。勿論めすこは公園だと云ふ事をこれからは忘れない様にしよう。そして公園の紅葉にしたつてこの紅葉にしたつて大して變りがないならこうして山の中を一人で吞氣に歩き乍ら眺める紅葉の方がいゝと云ふ結論に達した。それから今度は同じいゝと云つても一體この景色の何處がいゝかと考へる。飛驒とか益田川とか云ふ固有な名詞を離れて又自分か此處を通るのが初めてであると云ふ條件を暫く置いてみると秋だから山は紅葉してゐるのであつて日本國中何處へ行つてもある様な景色に思はれ、何だか平々坦々たるよさになつて了ふ。さう云へば上高地には穂高と云ふ特異な存在を認めればならないがそれだつて何處も見た眼には通り一遍の讃辭を與へる程度の氣持にしかなれなかつた。都會人に占領された上高地を後にする、山越えて道を氣遣ひ泊りに心配し乍ら飛驒の山間へやつて來たその旅情には浸る事が出来てもこれでは餘りに空疎だ、經驗が貧弱である。谷間がひらけると山村が現れる。山腹の茅葺は既に刈取られた後で山民は稗を刈つてゐる所である。今日も夕暮近くなつて峠に上る。かの御料林を除けば飛驒とはこんなにも森林の少ないものであつたか。行方は山らしいもの

もなくなつてさう雲の下にはゆるやかな起伏が一面に横つてゐる。私は飛驒高原の牧場地帯に近づきつゝあつたのである。

牧場にも色々あつて神津牧場がバタイ奥いので有名ならこの邊の牧場は原始的な處がその特徴であらう。圍爐裏をかこんで盃を取りかはし乍ら夜おそくなるまで村の生活に就いて話に盡きなかつた。米はお正月の餅に揚ぐ位しか出來ない村、稗さへ買はれば足らぬ村、植林の殆ど無い村、この窮乏した山村を支へてゐるものは牧畜と炭薪と藁藁による收入の外なかつた。山民は次第に森を伐り林を焼いて牧場に變へて行つたから今では自家用の薪をとる以上には山林が殆ど残つてゐない。牧場に放たれた牛馬は茅葺を嗜食するがボツラは嫌つて喰はない。ボツラは炭の地上部の事で之に對して地下部は炭根と呼んでゐる。四年も経つと牧場にはボツラ許りが繁茂して最早や牛馬の飼料に不足を來たす様になる。そこで牧場を他に移してその跡地から炭根を堀り起すのだが、すつかり起してしまふまでにはこれが又四年程かかる。それから四年間位は放置しておいて再び牧場にするのである。種付けさへしておけば後は獨りでに生れ、獨りでに育つ牛馬と較べるならば炭粉の方は恐しく手間を食ふ代物なのだ。堀り起して來た炭根を水車で掘いてその炭粉を採るために一家の主婦は朝の三時に起き出で、働く。

切な人達は街道へ出て自動車に乗る様に勤めて呉れたが新しい智識を得ても一度景色を見直したいと云ふ願望が私に困難の多い道を選ばせた。村の娘は今日も箕笠着けて飯を擔いで炭根堀りに行く。その歩調には山村の憂鬱がなからうか。海の彼方の南の國へ渡つて行つた燕の群さへ迷ひもせずに田舎に育つた燕は矢張りもとの田舎に歸り、町で生れた燕は又町の廟へ歸つて來るに相違ない。私は都會から來た旅人だ。そこで

第五十七回小集會通知

日時 来る十一月二十五日(金)

午後七時開會

場所 赤坂溜池・三會堂

講演

◆冬のクル溪谷其他

會員 三田 幸夫氏

◆外金剛集仙峰に就て

會員 小川登喜男氏

(司會者伊藤)

立入ることは禁物である。私は徑を歩かばならない。高原を彩る秋の草は大抵枯實して了つたのだらう。所々に咲き残りの松虫草や梅鉢草を見かけるだけで雨に濡れた尾花の中を分けて何處までも辿つて行くやが霧の中から牧棚と一寸した窪に無人の番小屋が見付つた。千草のなつかしい香を嗅ぐと野性がムラ／＼と蘇つてくるのを知る。もうこゝを離れる事は出来ない。火をたきそして泊つて了ふ。

4

牧場の片側は尾花の原、片側はホッラの原、その間に沿ふた小徑を高原の頂上まで上る。乗鞍嶽と御嶽との間、山らしいものない山に旅して、云ふ山の見方を幾らか味ひ得た。景色のよさを求めたりする文人墨客の眞似事には興味がなくなつても餘り惜しくはないと云ふ確信を抱いて阿多柏の谷を自動車線へと下つて行く。一九三二、一、九

山小屋建設に

關する報告

朝日講堂で山小屋建設基金募集講演會を催してから、今秋で丁度三年目となる。日本山岳會が何處に山小屋敷地を選定するかの問題に就ては、各方面の意見を聴取して、決定までには數回の協議會を開いてゐる。第一の必要條件は一般の欲求する場所でないならぬ。雪崩及風雪落石等に安全である事、水利の便のよき箇所、四季を通じて利用價値の高き地點等も考慮に入れる必要がある。

先づ、選ばれたのが北アルプスであつて、後立山の冷池を第一候補地と定め、各種の調査に着手したが、警林署には既に同地點に對する多數の借地出願がある事を知り、會では更に有用にして、望のある第二候補地種高潤澤の池の平を選んだ次第である。

冷池の候補地を調査してゐる當時

世間では兎角面白くない評判のあつた事を聞いてゐる。即日本山岳會は冷池の借地出願に際して、競争に敗れたとか、土地の某有力者が、政治的の運動をした等といふデマまでが飛出したけれども、本會では借地出願の運びにまで到らず、冷池の候補地は斷念してゐる。競願運動云々は當時でも一笑に附されてゐたものである。今この機會に於て事實無根なる事を明言しておく。

種高潤澤の候補地は、本會が選定する迄もなく、種高の山登りには重要な根據地であつて、一般の希望は久しい以前からのものである。夏は潤澤の岩小屋利用者と池の平のテントの數にても首肯し得るし、冬は横尾の岩小屋と德澤の小屋は絕對必要な根據地となり、又、種高小屋は年々積雪期の利用者の數を増してゐる現狀である。

池ノ平の選定が決定してから、直ちに願書提出したのが四月一日である。出願から許可までの經過は次の日誌を見ていただき度い。種高が國有林、天然記念物指定區地である上に、國立公園候補地であつた事が、東京警林局、松本警林署方面の査定に尠からず長時間を要した事であらうが、これ程に困難のあつたことには實に初めての経験である。

正式の借地許可を受けてから、建設委員は積極的活動を始めた。本會で設計を依頼した建築技師瓜生正氏に潤澤視察は將來の建設に對して最も重大なる意義を有つたものであつた。そして今後の計畫方針は大體左の如く決定してゐる。

一、詳細な潤澤附近の地圖作成
一、敷地附近の雪積量及雪崩の調査
一、管理、經營方法に就て研究、本年中に具體案作成
一、設計圖、本年中に決定の上、一般に發表
一、構造 木造石材コンクリート圍み、二階建收容約四十名
一、基金募集は費用見積りの決定次第、廣く寄附金を募る。

會員大會通知

來る十二月十日午後五時より赤坂三會堂に於て會員大會を開催致し候間御出席被成下度此段御通知申上候

尙 當日午後七時より松方三郎氏の山小屋に關する講演有之候間申添候也

一、工事豫定 來春着手、八、九月頃までに完成
以上が簡單ではあるが、今日までの山小屋建設に關する報告である。今まで何等具體的に會員諸氏へ發表しなかつた事は正式許可の到着を待つてゐた爲であるから、御了承願ひ度い。

詳細なる内容を發表したいものと考へてゐる。今後とも諸氏の絶大なる御後援を賜らん事を希望して止まない。(角田)

山小屋建設委員
昭和七年四月一日 松本警林署へ種高潤澤山小屋敷地借用の願書提出
四月末日 積雪中にて實査困難夏季まで願書保留の旨同署より通信あり

六月十五日 同署へ照會狀發送
七月十九日 角田登山の途中、松本に於て再び照會狀發送
七月二十五日 角田、松本警林署出頭、設立の主旨計畫及將來の方針を説明、現地實査の日取を約す
八月十日 角田同署出頭、署員平沼善治氏、同行上高地へ向ふ。同地泊、人夫大和由松
八月十一日 唐澤池ノ平實査、上高地に戻り宿泊(小雨)
八月十二日 平沼氏下山
九月十日 田中、東京警林局出頭、意向を聞き、上京中の松本警林署長に面談。
九月十五日 冠評議員東京警林局出頭、意向を聞く。
九月二十日 東京警林局より、質問の件あり出頭の旨の通知あり
九月廿四日 松方同局出頭、本會の組織内容に就て説明
十月一日 松方出頭、念書及參考書類提出
十月七日 松本警林署より許可あり、直に請書提出
十月十五日 角田、建築技師瓜生正敷地檢分、調査のため夜行にて松本へ向ふ

十月十六日 風雨上高地泊、人夫今田重太郎、上條孫人
十月十七日 唐澤池ノ平檢分調査の上、山小屋敷地附近へ積雪標柱を建つ。角田松本へ下る。
十月十八日 瓜生氏下山。角田松本警林署出頭。京都今西錦司今田重太郎敷地檢分。主として雪崩に關する調査をなす。
十月廿九日 夜本會圖書室に於て研究會開催、出席者今西、松方、浦松、角田、渡邊、瓜生、田中、吉澤一郎、黒田孝雄、國藥研二郎。設計雪崩の調査に就き協議す
十月三十日 午後圖書室、夜日比谷東洋軒に於て再び協議せり、出席者小島、冠、加納一郎、田中、神谷今西、角田、松方、渡邊
以上

原稿募集
今後會報は擴大の方針にて編輯されます。研究、論文、消息、其他多數御投稿をお願い致します。
次號〆切 十二月一日
原稿 十六字十二行詰用紙にて十二枚を限度とす

スキ―其他購入優待券
東京本郷美滿津商店より本會宛優待券が送られて來ました。同店にて作成のスキ―及其他附屬品の購入に對して、本會々員を優待する意味のものです。希望者は本會圖書室宛御申越下さい。郵便にて請求の節は返信料同封のこと。

新理事選任通知

明年度理事改選に際し、改選せらるべき理事五名に對し役員總會より同数の理事候補者を推薦致し、十月下旬會員各位に御通知申上げ各位よりの候補者推薦を待居候處締切日たる十一月十二日迄に御推薦の向無之、改選すべき理事の數と同數と相成申候、從て曩に役員總會の推薦したる五名の理事候補者は會則第十二條並に細則二の(ト)に據り投票を行はずして當選、明年一月より就任せらるゝ事に決定致候

新任の五氏(黒田孝雄氏、松井幹雄氏、額田敏氏、福島昌夫氏、高橋健治氏)は何れも深き經驗を有せらる方々にて本會今後の活躍見るべきもの有之と被存候、何卒會員各位に於かれても倍舊の御支持御後援を賜はらんことを奉懇願候

尙各理事の事務分擔は決定次第會報誌上にて御報告可申上候

右不取敢御通知迄 敬具

昭和七年十一月

日本山岳會役員總會

會員各位



研究欄

Zmutgrat 斷片

吉澤 一郎

あり來りの二つの原因から Zmutgrat: Climbing を餘儀なくされて居る今日此頃、マッターホルンの研究を始めました。どうせ汽車賃はかゝらないのだから少し遠つぱしりをしてやれと、白羽の矢を立てたのが此の山でした。家が山岳會の圖書室の近くなので例の小澤さんから出勤簿云々を云はれる位通つてはアルパインジャーナルに讀み耽つて居ます。それに浦松氏とか松方氏といふ實際の經驗家が色々、閑暇な時には話して下さるので、本の上では解らぬ細かな點がはつきりして、大變都合もよく、感謝もして居る次第なのです。研究のケの字にも行つてない頃からこんな事を書くのは烏滸がましい話ですが日頃の圖々しさを曝け出して、貴重な紙面を汚す事にしました。

X X X

Zmutgrat と云へば誰でも最初に考へるのが A.E. Mummery と W. Penhall の然し私にはどうして W. Penhall の方に好意が持てゐないのです。成程マンメリーは色々素晴らしい新登

路の開拓もして居り、名實共に具はつた立派な登山家であつたでせう。然し此のツムツト稜に關する限り、私にも一寸腑に落ちぬ點があります。以下私の書く事は J.P. Farrar の記述及び Theodor Wundt の "Zermatt und seine Berge" その他に依る事を御断りして置きます。

X X X

詳しい話は後の機會に譲り、此處では直ちに一八七九年、九月一日の

事務所移轉通知

東京市芝區琴平町一番地五號

不二屋ビル 三〇七號

日本山岳會

振替東京四八二九番

昭和八年一月一日より、從來の芝區高輪南町三〇番地の本會事務所を右の通り移轉致します。依つて本會宛一切の通信は右へ願ひます。

午前二時半から始める事にします。

X X X

三年以來の宿望を達せんものと、案内者 E. Imago 及びその友達である L. Furber (及びポーター一人) を連れてベノルのツエルマツトを出たのが前記の時間なのです。谷は深く雲に閉ざされて居ましたが、一寸の機會をも取逃しては一大事と許りに出かけました。雲行きが悪い爲、途中シャレーで一眠りしましたが七時半頃になつてマッターホルンだけが

雲の外に出てゐるのを見て、勇躍突進する事になりました。豫定ではその日途中で夜營し、翌日登頂する積りであつたのです。

所がツエルマツトからも良く解る雪稜上端の岩峰、第二番目の「齒」の上まで来た時、時間の都合で少し戻り山稜上に夜營をする事になりました。寒さの爲に殆ど眠る事は出来ませんでした。翌朝眼を覺ますと軽い雪が降りはじめ、山頂は厚い雲の

中に隠れて居ました。

斯くして其日、諦めてツエルマツトに退却しやうとする途中、ツムツト米河の上でマンメリーの一行と會したのであります。ツエルマツトに歸つたもの、其の心は既にツムツト稜に戻つて居ました。其れにマンメリー(當時は未だ有名ではなかつた)には "Dru" の征服者 A. Burgener が従つてゐるのです。みす／＼此の出しや張り者に貴い勝利を譲つて了ふ事は出来ません。此の考へは

又イムゼンガにしても同じでした。斯うして夜の十時といふに再び元の道を引き返して行つたのであります。然し聞ひは遂に僅か一時間十五分の差でマンメリーの勝利に歸しました。實を云へばベノルは後に彼の名の附いたクルワールのほゞ中頃を横切つてから暫く登つて一つのバンドに達し、其れを最初不可能のものとして、右上に擲んだが之又行き詰り結局元のバンドの所から延び擴つてゐる薄氷に被はれた急壁を登りました。此處で約二時間損をして居るので、若し最初から之を突進してゐたならば勝は當然の資格者の上に輝く事になつたらうと思ひます。

勝負には負けたがベノルの通つたルートは——たとへば或る事情(マンメリーの組が先、即ち上に行つてゐる事一つ)があつて、止むを得ざるに出た結果かも知れぬが——マンメリーのそれとは比較にならぬ程困難なものであつたのです。マンメリー自身は非常に難かし相に云つてゐるが三日後に彼のルートを通つた Baumann は大して困難は感じて居ない。尤もウインバーと競つたカレルでさへもあの "Gardie" を非常に大袈裟に云つてゐる所を見ると、初登攀にはある種の錯覺が伴ふものであるかも知れません。嚴密に云へば兩者ともツムツト稜を完全に通つてゐる譯ではありません。所謂ベノル、クルワールとカレルス、ガレリーの間に於てベノルは全然 face を登つて居ます。此の點の詳しい事情も多少書き留めてありますから御覧みなし御紹介してもいいと思ひますが、

此處では省く事にします。

× × ×
 Y メーリーの書いた "My climbs in the alps and Caucasus" の十一頁に次の様な文句があります。

... When we met Penhall's party returning, and heard that they had definitely abandoned the ridge route,.....

之に依ればペノルはマンメリーにリッジルートに全然放棄したと語つた事になりますが、Captain Farrar は之を不可解な事として居ます、何となればペノルの報告には何等特別の困難に就て書かれて居ないからであります。

尙 Edward Davidson 卿の手記の中に、Cap. Farrar の言として次の様な事が引用されて居ます。

「此のルートを最初にやらうと考へ、爾までの可能性を指示したのはマンメリーではなくペノルであつた。

ペノルは充分の資格もあり、初登攀をもやり得たのであらうが、マンメリーは男らしくないといふ事はない、其れに割込み、ペノルの労役の當然の成果を盗みとつて了つた」と。

之に對しては勿論種々異論があり、人の行爲又は人格を批判する事は餘程考へねばならぬ事なので、假令自己が最も信頼する者の言だとして、其の言葉のみを採つて一人の人間を片附けて了ふといふ事は早計と云はれねばなりません。私は只、第三者の立場から、ペノルの方に同情をなるといふに過ぎません。

(七、一一、五)

食料の研究

昨夏より今夏に至る一年間、雪溪中に種々の食料品及び温度計を埋めて觀察したる結果を何等かの御参考の爲にもと御通知申上候。

場所——穂高小屋より六十米下の潤澤雪溪。埋没——一九三一年八月。雪溪を約一五尺掘り下げ（地面の露出する迄）後記の物品を埋む。

雪溪の底約一尺は青氷にて打砕く。表面の雪溶けて零となりて雪溪の底に滴下するを認む。發掘——一九三二年八月。埋没物品——温度計、動物性食料品（牛肉、豚肉、鶏及び鮮魚）。植物性食料品（果實、野菜等約十種）。飲料（酒類、味噌、カルピス等の瓶詰）。菓子若干。以上をバラフィン紙に包み、一部は其儘、他は更に茶筒に入れたり。

結果——瓶詰の飲料には變化無くサイダーの如きは開栓時に良く泡立つ。焼酎、味噌は非常に美味となる。動物性物品及び植物性物品は全く腐敗し其しきは原形を止めざるものあり。凡て茶筒に入れたるものは其の中に存在する空氣の爲に腐敗せる程度著し。殊に山葵は茶筒中のも

のは腐敗せるも雪中に其儘埋めたるものは發芽せるを見る。腐敗菌は通常の種類にして特殊のものを認めず。キャラメルは全く溶け去りて箱のみ残る。茲に興味あるは温度計にして場所を異にせる二箇は各々最低値に零下二度及び零下五度を示す。因に尾根の岩間に置きたるものは（雪にて蔽はる、場所）零下十三度、穂高小屋軒下零下十八度を示せり。積雪の壓力の爲に茶筒の破壊す

るが如き現象は認め得ざりしも溶水が外部より浸入して其の爲に一層腐敗を助けたる跡歴然たり。埋没物は一年間に於て移動したる形跡なし。（長澤佳熊）

山の消息



紅芝寮

上越國境茂倉岳東麓芝倉澤出合に新しい山小屋が建設された。所有管理東京吉祥寺成蹊高等学校不言會旅行部。木造トタン葺き二階建二十坪定員二十名。合宿期間を除き一般に公開。使用料一般登山者一泊五十銭。學齡未満の者無料。食料を除き寝具燃料炊事具一切を備ふ。希望者は豫め届出を要す。但し今年中は準備の爲一般使用謝絶。

茂倉の岩場へ、清水峠を中心とするスキーの山に、根拠地が一つ増した。寫眞設計圖によると、木造の堅牢なもので、深雪地の爲に二階より入る設備もある。白樺小屋の前例があるやうに、ルンペンの入に注意せられ度し。

緑樹山荘

東北五色温泉の奥、青木スキー小屋の隣に、六華クラブで今秋スキー

ヒュッテを新設した。十月十七日が小屋開きで、本會より横有恒氏が臨席してゐる。木造二階建十八坪。スキー置場に充分の面積あり、便所は三ヶ所、浴槽一坪、炊事室とリビングルームとの區別、寢室はカーテンにて適當に分割し得る等、設計圖による想像ながら、使ひよい小屋と思ふ。但し一般には公開されない。

乗鞍に新しいヒュッテ

乗鞍岳の七合目金山平と位の原間に去る五月中旬から本年の冬山をめざして竣工を急いでゐた乗鞍岳スキー小屋が今回全く竣工し内部の設備も立派に出来上つた。位置は冷泉小屋を上る事約十分で到着し純然たるスキー小屋として現れた譯で收容人員百名の大規模なもので浴槽と完備した乾燥室まで備はつてゐる。外見はロサンゼルス市の市營キヤムプを真似てロッジを縦に合せた二階建のスマイトなもの、このスキー小屋の完成に依つて乗鞍スキー場に於ける尾根、佐ノ原、金山平、番所の四ヶ所が完全に結ばれた譯で冬山愛好者から歡喜を以て迎へられることであらう。尙此小屋の經營者は當所の菊屋主人齊藤氏で工費約二千三百圓を費したる由（信濃毎日所載）

登山者へ福音

冬山を目ざす北アルプス登山者は昨年邊りに比較すると三倍近い激増であるが之等は何れも穂高連峰をねらつて猛烈な争奪戦を演ずるらしいが松本警林署ではその中心地潤澤谷一帯は燃料が少く放置しておくことと自由立木を伐採される憂ひがあるため今年には特に豫防と登山者の優遇の意味から人夫を警勵して潤澤谷を採取せしめ岩小屋附近へ運び登山者のために無料で自由に使用せしめ、又穂高峠下白澤渡の巡視小屋を無料で解放することになつた（信濃毎日所載）

今夏の登山客

今夏の北アルプス登山シーズンも天候に恵まれたため不況の折にも拘らず意外の盛況を見せて無事終りを告げたが、この決算を松本警が登山者カードにつき詳細に調査を行つた

上高地の自動車道

從來中ノ湯まで通じてゐた自動車道は今秋深澤人大正池間を擴張工事してゐる。専用道路とかで、澤人中の湯間を獨占してゐた松筑自動車の横暴は苦々しい事だ。來夏は縣營道路となり、自動車は大正池まで入り、料金も安くなる由。

上高地のホテル

話題の中心になつてゐた上高地のホテル新設は今秋可成り具體化して來た。場所は霞澤の下、梓川左岸の平二階建、部屋數三十、他に三階數部屋あり、別棟にて登山者向の宿泊所も出来る由。帝國ホテルの經營であるから立派な設備のあるものが出来る事と思はれる。來春起工、夏までには完成の豫定と聞く。

ところ今シモン登山者總數一萬四千二百三十三人で前年同期の一萬三千五百二十名に比し五分四厘に亘る七百十三人の増加を示した。而して之が職業別を見るとスポーツとして登山が學生から一般に普及したもので學生は全部の四割を占め五千六百七十三人、次いで多いのは會社員の割七分二千四百八十人、商人が一割五分二千二百七十八人、第四位が教員で八分五厘千二百五十七人、次が公吏で五分に當る七百八十一人、鐵道員の二百七十四人、醫師百五十四人、農業百七人、軍人が七十八人、藝術家五十七人、寫眞屋三十八人等である。(信濃毎日所載)

本會駒ヶ岳遭難事情

昨年十一月初旬、本會駒ヶ岳に行方を斷つた大阪工業大學々生井戸廣正、同學專門部卒業生中川定治兩君の遭難が本年八月一日、奈良井御料林白川谷(行者岩東方の谷)内に於て本會山岳會樋口朝一氏によつて發見せられた。

同大學山岳部が昨年搜索情況を記して發行した「本會駒に友をたづねて」の續編として本年九月發行した「井戸、中川兩君の遭難事情」によると恐らく兩君は十一月四日早朝三ノ澤岳に向ひ、寶剣を正午頃通過、一時半頃伊那小舎を徑て登山道より白川谷に下りたが意外の難場と惡天候に遂に力盡きたものと思はれるとある。何れ詳細は「山岳」に發表の豫定。

第四回エヴェレスト・エ

キスベディシオン

一九二四年の第三回エクスベディシオン以來中絶せられてゐたエヴェ

レスト登攀の計畫は來年更めて行はれることになった。尤も此の間、アルパイン・クラブとロイヤル・ジオグラフィカル・ソサエティーを中心として造られてゐたエヴェレスト委員會は存続してゐたのであつて、試みが今日迄なされなかつた主たる理由はチベットの入國の許可が得られなかつたからなのであつた。従つて委員會は時々事情に應じてチベット政府に許可を乞ふてゐたのが、今回許されたわけなのである。

第四回エクスベディシオンを明一九三三年に行ふとのことは、前述の二團體の代表者の名に於いて九月三日附に發表せられ、同日の「タイムス」にはサー・フランシス・ヤングハスパントの之に關する特別寄稿が掲げられた。

費用は第一回の時に募集せられた五千磅がその儘使用せられる。といふのは之等の三回のエクスベディシオンはその都度、出版その他によつて實費が回收せられてゐたため、之だけの金額がその儘委員會の手に残されてゐたのである。従つて今回は更めて費用を募集するの舉には出ない。

除のリーダーとしてはヒュー・ラットレンツが選ばれた。此の人のヒマラヤに於ける經歷については、今日迄此の方面の登攀に若干の注意を拂つてゐた人は、何人も承知してゐる筈である。そして彼の名は特にカナンダ・テヴィと共に想起せられる。彼のひととなり、並にエクスベディシオンの經歷については、彼と一九二七年のカナンダ・テヴィの行を共

にしたドクター・ロンガスタッフが九月九日の「タイムス」に詳細に書いてゐる。I.C.S.としての此の人の印度に於ける全般的經驗と土地の人から受けてゐる信用並に彼の數度のヒマラヤのエクスベディシオンはノートン無くシオフレー・ブルースなき——此の二人は共に軍務のため今回の行に加はることが出来なかつたラットレンツは此の二人が愈々望みなしと決つて始めてリーダーとしての責任を引受けたと云はれてゐる。

——後の此のエクスベディシオンに於ては、誠に重大な役割を演ずるであらうと考へられる。

一行の姓名は後に至つて次の如く發表せられた。何れもアルパイン・クラブの少壯登山家である。

F.S.スマイス J.E.H.グリー

ステッド J.バーニー C.G.クロウフォード W.ハリス J.ロン

グランド N.オテル E.O.シエ

ベヤール E.E.シツプトン C.

R.グリーン W.マッククリン

以上十一人である。以前のエクスベディシオンに加つた者はクロウフォード、オテル、シエベヤールの三人である。その他ロングランドを除く總ての名はカンチエンジャンガ、カメツト、その他のヒマラヤ或はアフリカのエクスベディシオンによつて既によく知られてゐるものである

クリン、マッククリン二人は主として醫療に専任するとの豫定である

年齢から云へば、リーダーのラットレンツ、クロウフォード、シエベヤールを除く全部四十にまだ遠い年配である。理想から云へば二十から

餘り出てゐないあたりを希望してゐたらしいのであるが、經驗の方面の顧慮が若干平均年齢を上げしめたものと考へられる。

ヤングハズバンドなどの書きぶりから察して今回の行に酸素吸入器を携帯するかどうかは相當疑問と思はれる。

何れにしても一行は一月初旬印度に向つて出發し、五月に最後の登攀にかゝる豫定であるといふことである。

エクスベディシオンの事務一切はジオグラフィカル・ソサエティー内のエヴェレスト委員會の手によつて處理せられる。

會員通信

白山の小屋

加賀白山高飯場跡に暫定的ながら積雪期使用を目的とする山小屋が今秋建設された。根據地を高めた事とスキー練習の適地である點でよくこられる。位置は夏道一九〇〇米の別當谷に面し、三間二間半、茅葺、入口兩端にあり、内部トタン張、中央三尺巾の土間が通じ、收容十五名位。所有白山振興會、保管市ノ瀬永井喜市郎。今冬は同會にて米若干俵、木炭約十俵、布圍二十枚備付の豫定。將來は改築する模様なるも、この數年は充分使用可能と思はれる。

中野正英

建高へ

池の平に新しく建つた山小屋敷地附近の積雪標を見ながら、潤澤から小屋へ登りました。大瀧小屋を降

り奥穂高を中心とし、それから白出澤を右俣へ下り槍平から奥丸山附近に遊び槍肩に上り、天上澤から下つてきました。湯俣出合の小屋には大きな湯泉浴槽が出来てゐます。一〇、二七 湯俣温泉にて冠生

銀山平より尾瀬沼へ

銀山平より只見川を遡つて尾瀬に出て見ました。北ノ又川の美しさもさること乍ら此地方の人達の醇朴さを非常に嬉しく思ひました。鷹ノ巣三丈ノ瀧間、温泉小屋幾間間の好い登路が今年開かれました。前者五時間後者四時間の行程です。温泉小屋は番人常住、荷鷹ノ巢より燦田代に廻り温泉小屋に達するのは樂な一日行程ださうです。

三溝貞之助

集金郵便制採用の件

會員各位よりの御希望により明年度より會費の徴集に集金郵便制を採用致す事になりましたから右御含みの上宜しく御取計ひを願ひます。

會員名簿作成について

會員名簿作成の爲、近く御手許に問合せの往復ハガキを差上げますから至急御返事下さる様御願ひ致します。

會員章をつけて下さい

山に登られる時

小集會に出席される時

集會室圖書室に來室される時

會員章をつけて下さい



新刊圖書紹介

チロル傳説集

山上雷鳥著
黒百合社刊 頒価一圓二十錢

ピンからキリまで山と山登りの記事でうづまつてゐるカンカンの書物の多いなかに、かうした柔かい、無邪氣な、肩のこらない読みものだけの本が、二冊はあつてもよからうではないか。これは先に出版された「アルプス傳説集」と完全な姉妹編で同じヘンダーソン・カルバートの本から取材されたチロル地方の傳説といふより、むしろお伽話といふ感じの物語り四編をあつめてある。山の高きくらべとか、開山史とかいつた山岳本位のものでないにしても、名にしおふ山岳地帯を背景とした昔語りで「ローゼンガルテン物語」以下、讀み始めたら面白くて手をはなせないといふのも織譯の臭味が毛ほどもなくて、すっかり取りこなしであるからで、これはたゞの「岳人」ではでない仕事である。山を趣味とする人に好個の著作であるが同時にまた山そのものにさして感興をもたない人々にも薦めて悅ばれる善き書物であると思ふ。

(加納一郎)

山 第一號 YWCA山岳會

昭和七年十月二十日發行
婦人のみによる登山團體がこの一兩年大分出來た様だ。登山の發達は誠に驚くべきだ。

YWCA山岳會は之等婦人登山團體の中でも最も目覺しい活躍をしてゐるもので、會報「山」は滿一年間の報告である。北アルプスの初冬(中村) 初冬の常念(三田) 二月の白馬岳(黒田) 雪の上越國境(森岡) 春の仙倉山(中村) 立山、劔岳の生活(鳥山吉端) 笛吹川東澤湖行(竹内) など懦夫を起ししむるに充分のものである。尙同會の今後の華々しい活躍を期待すると共に、山を中心とする女性の集りがよく融和して永久に續かれたん事を希望する。

(S.T.)

「登山とスキー」

十一號、アルビニズム社發行 百二十五頁 定價五十錢

内容 初登攀を語る——初登山に寄す(今西) 想ひ出(佐藤久一郎) 小槍と中山彦一(平賀) 初期の北海道の冬山(加納) 一九二四年に於ける積雪期の白根三山(桑原) 瀧澤谷の追憶(四谷) 上越線全通以前(角田) アルプス登山史(小出博) 日本で一番早く滑れるスキー地——富士山(小林立山) (相山) 白馬(小笠原) 乗鞍と御岳(高田) 冬期の八ヶ岳、赤岳、鏡泉を中心として(中村知一) 其他

「山と溪谷」
十六號 山と溪谷社 百三十九頁 定價五十錢 内容 臺灣の山岳——臺灣の山岳と登山界(伊藤彦一) 大霸尖山・次高山の縦走(北田正三) 平尾高原に就て、主として地形學的考察(寺元正見) ノールウエーと

ころん(岡本信三) 紀行——利根水源湖行記(大町周一郎) 中央アルプスの縦走を語る(マレー・ウォルトン) 氷の山に就て(三月月直之) 其他三角點

第十一輯 フアガスクラブ
水長澤に文殊菩薩を探る(荻島四雄) マナイタグラ谷試登(馬渡務) アルバイン・カレンダー

山と溪谷社發行 225 X 21 cm. 定價一圓二十錢

昨年同社出版のアルバインカレンダーは、初めての試みでもあつたらうが色々の缺點が目について、外國のものに比べて未だくといふ感が出てならなかつたが、今度出版されたのを手にして、その素晴らしい飛躍に先づ一驚を喫した。

豫て川崎君から「今度は塚本閑治さんが一肌ぬいで製版と印刷に當つて下さるさうですから」ときいてゐたので、不妙期待してゐた譯であるが、それが裏切られず済んだことは甚だ嬉しい。事實前年とは全く比べものにならない努力の跡が見える體裁も垢抜けしてきた。用紙はアイトペーパー、寫眞は網版になりサイズもカビネ型に統一され、一週一頁で寫眞一枚宛になつたことは最も良い。之なら海外への贈りものとしても、そんなに退けぬを感じないですむ。併し題材の選定、製版、印刷等の技術に未だ充分研究の餘地があること、考へられるから、來年度に於ては今一層立派なものにせらるゝ様希望する次第である。(神谷恭)

新刊地圖紹介

十石峠(昭和四年要部修正)

餘地峠—動能が從來は縣道になつてゐたが縣路に訂正。
熊倉—大上峠の小徑が續く。
神流川上流坂下—十石峠が縣路に訂正。尙途中の一軒家が三軒となり水ノ戸の名稱入る。

勢戸—鹽ノ澤峠—坂下—濱平に林用馬車軌道補入。
小倉山が御座山と訂正。
海ノ口—梓山が縣道と訂正。

蓼科山(昭和四年要部修正)

標題に「タテシナヤマ」と假名が附された。
芦田より矢ヶ崎に至る從來の小徑が縣道となる。

右道路に添ふ蓼科牧場無くなる。
二子池が双子池と改まる。

夏澤峠、天狗岳間の二五八〇Mの峰に根石岳の名稱附せらる。
八那池より本澤温泉に至る道が訂正され、稻子小屋及牧場の印入る。

槍ヶ岳(昭和五年修正測圖)
相當種々の點が修正されたが、先づ新載道路としては

五色原—藥師—三俣蓮華岳
三俣蓮華岳—烏帽子—針ノ木峠
三俣蓮華岳—槍ヶ岳
双六岳—笠岳
大天井岳—槍ヶ岳
高瀬川—水俣川—天上澤—東鎌
燕岳—コシ澤—高瀬川
東澤—中房温泉
中房温泉—燕山莊(訂正)
燕山莊—燕岳—東澤乗越—餓鬼岳
二俣小屋場—横通岳—常念岳
登山小舎としては上ノ岳、黒部五郎、三俣蓮華、烏帽子、殺生、肩、

スゴ、東澤乗越、湯俣等が新たに記入されたが双六小屋の無いのは如何したのだらう。
次に山名は横通岳、南澤岳、樺澤岳、双六岳等が入り、鷲羽岳、蓮華岳の有名な誤りが訂正され、水晶山が黒岳(水晶山)、五郎岳が野口五郎岳、中ノ俣岳が黒部五郎岳(中ノ俣岳) 鎗ヶ岳が槍ヶ岳となつた。

尙奥ノ平が雲ノ平(奥ノ平) 團惠谷が川九里(團惠) 谷となり、太郎兵衛平、五郎池が新に記入された。
地形は高瀬川のコシ澤、北鎌尾根等が大分訂正され、北鎌の獨標二九〇七が削られた。

立山(昭和五年修正測圖)

主なる新載道路は。藤橋—稱名小屋—弘法小屋。立山温泉—室堂。ザラ峠—藥師岳。室堂—別山乗越—劔澤—池ノ平—鎗釣。折尾谷—十字峽。烏帽子—針ノ木峠—鹿島槍。刈安峠—五色ヶ原等。藤橋—立山温泉、平ノ小屋—ザラ峠への道は訂正された。
山小舎は稱名、弘法、追分、五色ヶ原、別山乗越、劔、池ノ平、針ノ木峠、大澤、種池等記入さる。
尙地名の挿入は新越乗越、北葛岳、船窪岳、大日岳、丸山、三窓雪溪、小窓雪溪、長次郎谷、平藏谷、眞砂澤、タンゴ澤、一越、近藤岩、仙人池、二股、十字峽、下廊下、大澤、赤石澤訂正は鹿島槍が鹿島槍となり、仙人山と池平山が入りかはり、大日岳が奥大日岳、龍渡場が平渡場、マイタ谷がメクイ谷其他未だ澤山ある。以上の挿入及訂正名には首肯し兼ねる多くの點があるが今こゝでは述べ

ない。

標高では大汝山に三〇一五が記入され、鯉岳が三〇〇三となつた。地形では黒部川、鯉、立山を中心として非常に多くの修正がなされたが之等も紙面の都合上述べ兼ねる、何れ「山岳」でも發表しやう。

赤石岳(昭和五年修正測圖)

主要道路の新記入は

小澁川—廣河原—大聖寺平

易老岳—聖岳—大聖寺平

大聖平—荒川岳—藤段—横島

赤石岳—富士見平—横島。雨畑—

横島。横島—二軒小屋

小屋は萬助、千枚、荒川、赤石、

廣河原等である。

地名の訂正は荒川岳を前岳、中岳、東岳に聖岳を前聖と奥聖に分けた他、藤段、富士見平、百間平、中盛丸山、小赤石、千枚岳等の記入である。以上の他大井川に添つては材探の關係で多くの變化を來してゐるが直接登山に關係ないから省く。(田中蒼雄)

山岳第二十七年第三號廣告

本欄

秩父の山村と山路と山小屋と

姦姑嶺山脈

八雲ヶ原水蘚濕原に就て

北海道の山の動物

雜錄

オーヴェルニユ火山紀行

シユクサン峰に登る

冬の笠ヶ岳

北海道の熊の語

伊藤秀五郎

島田 武時

東 良三

辻村 太郎

谷川岳東南山腹に於ける岩面

削痕に就て 額田 敏

北米大陸の高峰 東 良三

一九三二年版「山日記」

編輯報告 角田 吉夫

遭難願末概報、新刊圖書紹介其他

數項

附錄

千島列島關係文獻表 佐々 保雄

第二十七年總目錄

約二百五十頁 寫眞十數葉

屏高山植物(石崎光瑤筆)

定價二圓 發行十二月中旬

次號原稿締切日 昭和七年一月末日



會務報告

十一月理事會

十一月十日午後六時より虎ノ門集會室に於て

出席 小島、高野、横、高頭、武田、

木暮、冠、島山、松本、渡邊、角

田、松方、神谷、伊藤、田中

一、山小屋に關する報告 十一月十

六、七日角田理事瓜生技師同道瀧

澤の現地調査をなす

二、「山岳」第二十七年第三號 目下

印刷中にて十二月十日頃發行の豫

定

三、年次大會 十二月十日開催

四、事務所移轉の件 明年一月より

高輪南町の事務所を虎ノ門集會室

に移す事と決定

五、會員名簿 昭和八年一月附を十

二月中に發行

六、會員の増加を計る件 積極的に

會員の増加を計る事に決定

書圖基金申込會員氏名

本誌第十九號に報告したる以後の申込者左の通りである。

東京 澤 智子(一口)

前回報告の分を加算すれば現在三十九名、四十九口である。

新着圖書

山上實鳥著 ナロル傳説集

山と溪谷 第十六號

山小屋 第十一號

樹氷 第十二號

アルペン 第八號

ルツクサツク俱樂部會報 第七輯

臺灣山岳會報 第十號

臺灣山岳俱樂部會報 第十號

豊崎登山俱樂部會報 十月號

しらかんば 第四、五號

都島工業山岳會

神戸山岳會々報 十月號

旅行 第一號

旅行 第八號

ベテスツリヤン 十月號

關西徒歩會

黒百合社

其 社

朋文堂

山人俱樂部

東電山岳會

第七輯

第七輯

第七輯

第七輯

第七輯

第七輯

第七輯

第七輯

第七輯